

イメージで読む宮沢賢治の世界

# 銀河鉄道の夜

## 目次

(左の各表題をクリックするとそのページへジャンプします。)

はじめにお読みください。

一、午後の授業

二、活版所

三、家

四、ケンタウル祭の夜

五、天気輪の柱

六、銀河ステーション

七、北十字とプリオシン海岸

八、鳥を捕る人

九、ジヨバンニの切符

十、切符の秘密 (物語の完成をイメージして「物語の続き」を創作しました。)

あとがきにかえて (言葉でイメージする銀河鉄道の夜)

# はじめにお読みください。

- このデジタルブック（電子書籍）は宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」をPDFファイルに変換してデジタル編集しています。パソコン又はiPad・iPhoneでお読みください。（パソコンはAcrobat ReaderでiPad・iPhoneはブック・アプリで開いてください。）
- 表紙（トップページ）の画面をクリック又はタップすると目次へ移動します。
- 目次に並んでいる章題をクリック又はタップすると各章題のページにへ移動します。
- 各ページの画面下部中央のページ番号（このページでは 3 ）をクリックすると目次に移動します。
- 画面両端の余白をクリック又はタップしてページを進めたり戻したりできます。（◀でページが進みます。▶でページが戻ります。）パソコンキーボードの←→か△▽でもページを進めたり戻したりすることができます。クリックでページを移動すると効果音が鳴ります。キーボードでページを移動すると効果音はなりません。
- iPad・iPhoneは、画面両端の余白をタップしてページを移動させてください。フリック（指で画面をはじく）で移動しないでください。
- パソコンのキーボードで、Windows・「Ctrl + L」、Macintosh・「Command + L」でフルスクリーンモードと通常画面の切り替えを行います。「ESC」キーでフルスクリーンモードは終了させることができます。フルスクリーンモードではページがランダムにいろいろな開き方をします。
- iPad・iPhoneでフルスクリーンモードを終了させるには、各ページの上部余白をタップしてください。
- デジタルブックを終了するには、パソコンではフルスクリーンモードを終了してAcrobatを終了させてください。iPad・iPhoneはフルスクリーンモードを終了してブックアプリを終了してください。
- 原作中の旧漢字は、すべて新漢字に直し、漢字、ひらがな、カタカナの表記を、現代文として読みやすい形に表記し直しました。内容、表現は一切修正していません。原作の内容、表現は変えず、現代文として読みやすい形に編集し直しています。
- 第十章「切符の秘密」は、物語の完成をイメージして創作した「物語の続き」です。この章は宮沢賢治の作ではありません。

## 一、午後の授業

「ではみなさんは、そついうふうに川だといわれたり、乳の流れた跡だといわれたりしていた、このぼんやりと白いものが本当は何かご承知ですか。」先生は、黒板につるした大きな黒い星座の図の上から下へ白く煙ぶった銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問いをかけました。

カムパネルラが手を上げました。それから四、五人手を上げました。ジヨバンニも手を上げようとして、急いでそのままやめました。確かにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、この頃は、ジヨバンニはまるで毎日教室でも眠く、本を読む暇も読む本もないので、何だかどんなこともよくわからないという気持ちがあるのです。

ところが先生は早くもそれを見つけたのでした。「ジヨバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジヨバンニは勢いよく立ち上がりましたが、立ってみるともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席から振り返ってジヨバンニを見て、クスツと笑いました。ジヨバンニはもうどぎまぎして真っ赤になってしまいました。

先生がまたいいました。「大きな望遠鏡で銀河をよく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジヨバンニは思いましたが、今度もすぐに答えることができませんでした。先生はしばらく困った様子でしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて「ではカムパネルラさん」と名指しました。すると、あんなに元気に手を上げたカムパネルラが、やはりもしもし立ち上がったまま、やはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見ていましたが、急いで「では、よし。」と言いながら、自分で星図を指しました。「このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジヨバンニさんそうですね。」

ジヨバンニは真っ赤になってうなずきました。けれども、いつかジヨバンニの眼の

中には涙がいっぱいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、もちろんカムパネルラも知っている、それは、いつかカムパネルラのお父さんの博士のうちで、カムパネルラといっしょに読んだ雑誌の中にあつたのだ。それどこでなく、カムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書斎から大きな本を持ってきて、銀河というところを広げ、真っ黒なページいっぱい白に点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れるはずもなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、この頃僕が朝にも午後にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともハキハキ遊ばず、カムパネルラともあんまり物を言わないようになったので、カムパネルラがそれを知って、気の毒がってわざと返事をしなかったのだ。そう考えると、たまらないほど自分もカムパネルラも哀れなような気がするのです。

先生はまたいきました。「ですから、もしもこの天の川が本当に川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川の底の砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを大きな乳の流れと考えるなら、もっと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳の中にまるで細かに浮かんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら、何がその川の水にあたるかといいますと、それは真空という光のある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりその中に浮かんでいるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに住んでいるわけです。そしてその天の川の水の中から四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集まって見え、したがって白くぼんやり見えるのです。この模型をごらん下さい。」

先生は中にたくさん光る砂の粒の入った大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光る粒が、みんな私どもの太陽と同じように自分で光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ頃にあつて、地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこの真ん中に立つてこのレンズの中を見回すとしてごらん下さい。こっちの方はレンズが薄いので、わずかの光る粒、すなわち星しか見えません。その遠いのは、ぼうっと白く見えるという、これがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれくらいあるか、またその中の様々の星については、もう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭りなので、みなさん

は外へ出てよく空をごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい。」

そして教室中は、しばらく机の蓋を開けたり閉めたり本を重ねたりする音がいっぱいでしたが、まもなくみんなは、きちんと立って礼をすると教室を出ました。

## 二、活版所

ジヨバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七、八人は家へ帰らずカムパネルラを真ん中にして校庭の隅の桜の木のところが集まっていました。それは、今夜の星祭りに青い灯りをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれども、ジヨバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々では、今夜の銀河の祭りに櫨の葉の玉をつるしたり、檜の枝に灯りをつけたり、いろいろの支度をしているのでした。

家へは帰らず、ジヨバンニが町を三つ曲がってある大きな活版所に入って靴をぬいで上がりますと、突き当たりの大きな扉を開けました。中にはまだ昼なのに電灯がついて、たくさんの輪転機がバタリバタリと回り、きれで頭をしばったり、ラムプシールドをかけたたりした人達が、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いておりました。

ジヨバンニは、すぐ入口から三番目の高いテーブルに座った人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚を探してから、「これだけ拾っていけるかね。」と言いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジヨバンニは、その人のテーブルの足もとから一つの小さな平たい箱を取り出して、向こうの電灯のたくさんついた、立てかけてある壁の隅の所へしゃがみ込むと、小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次へと拾いはじめました。

青い胸あてをした人がジヨバンニの後を通りながら、「よう、虫めがね君、お早う。」と言いますと、近くの四、五人の人達が、声も立てず、こっちも向かずに冷たく笑いました。

ジヨバンニは、何べんも眼を拭いながら活字をだんだん拾いました。六時が打ってしばらくたった頃、ジヨバンニは、拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱をもう一度手に持った紙きれと引き合わせてから、さっきのテーブルの人へ持って来ました。その人は、黙ってそれを受取とって微かにうなずきました。

ジヨバンニはおじぎをすると、扉を開けてさっきの計算台の所に来ました。すると白服を着た人が、やっぱ黙って小さな銀貨を一つジヨバンニに渡しました。ジヨバンニは、にわかに関色がよくなって威勢よくおじぎをすると、台の下に置いた靴を持って表へ飛び出しました。それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄ってパンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと、一目散に走り出しました。

### 三、家

ジヨバンニが勢いよく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には、空箱に紫色のケールやアスパラガスが植えてあって、小さな二つの窓には、日覆いが下りたままになっていました。

「お母さん、今帰ったよ。具合悪くなかったの。」ジヨバンニは靴をぬぎながらいました。

「ああ、ジヨバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は涼しくてね。私はずうっと具合がいいよ。」

ジヨバンニは玄関を上がって行きますと、ジヨバンニのお母さんがすぐ入口の部屋に、白い巾を被って寝んでいたのでした。ジヨバンニは窓を開けました。

「お母さん、今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って。」

「ああ、お前さんにおあがり。あたしはまだ欲しくないんだから。」

「お母さん、姉さんはいつ帰ったの。」

「ああ、三時頃帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだらうか。」

「来なかったらうかねえ。」

「僕行って取って来よう。」

「ああ、あたしはゆっくりでいいんだから、お前さんにおあがり、姉さんがね、

トマトで何かこしらえてそこへ置いていったよ。」

「では僕食べよう。」

ジヨバンニは窓のところからトマトの皿を取って、パンといっしょにしばらくむしゃむしゃ食べました。

「ねえお母さん。僕、お父さんはきつとまもなく帰ってくると思うよ。」

「ああ、あたしもそう思う。けれどもお前はどつしてそう思うの。」

「だって、今朝の新聞に、今年は北の方の漁は大変よかったと書いてあったよ。」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをしたはずがないんだ。この前、お父さんが持ってきて学校へ寄贈した大きな蟹の甲羅だの、トナカイの角だの、今だつてみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生が代わる代わる教室へ持って行くよ。」

「お父さんは、この次はお前にラッコの上着を持ってくるといったねえ。」

「みんなが僕に会うとそれをいうよ。冷やかすようにいうんだ。」

「お前に悪口をいうの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決していわない。カムパネルラはみんながそんなことをいう時は、気の毒そうにしているよ。」

「カムパネルラのお父さんとうちのお父さんとは、ちょうどお前達のように小さい時からのお友達だったぞつだよ。」

「ああ、だからお父さんは僕を連れて、カムパネルラのうちへも連れて行ったよ。あの頃はよかったなあ。僕は学校から帰る途中、たびたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちには、アルコーランプで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合わせると、丸くなってそれに電柱や信号標もついていて、信号標の灯りは、汽車が通る時だけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなった時、石油を使ったらカマがすっかり煤けたよ。」

「ぞつかねえ。」

「今も毎朝新聞を回しに行くよ。けれどもいつでも家中まだシーンとしているからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるよ。尻尾がまるでホウキのようだ。僕が行くと鼻を鳴らしてついて来るよ。ずつと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜の灯りを川へ流しに行くんだって。きつと犬もついて行くよ。」



「そうだ。今晚は銀河のお祭りだねえ。」

「うん。ぼく牛乳を取りながら見てくるよ。」

「ああ、行っておいで。川へは入らないでね。」

「ああ、僕、岸から見ただけなんだ。一時間で行ってくるよ。」

「もっと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒なら心配はないから。」

「ああ、きっと一緒だよ。お母さん、窓を閉めておこうか。」

「ああ、どうか。もう涼しいからね。」

ジヨバンニは立って窓を閉め、お皿やパンの袋を片付けると、勢いよく靴をはいて、では一時間半で帰ってくるよ。」といいながら暗い戸口を出ました。

#### 四、ケンタウル祭の夜

ジヨバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口つきで、檜の真っ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな一つの街灯が、青白く立派に光って立っていました。ジヨバンニが、ほとんど電灯の方へ下りて行きますと、今まで化け物のように、長くぼんやり、後へ引いていたジヨバンニの影法師は、だんだん濃く黒くはつきりなって、足をあげたり手を振ったり、ジヨバンニの横の方へまわって来るのでした。

（僕は立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。僕は今その電灯を通り越す。そうら、今度は僕の影法師はコンパスだ。あんなにくるっと回って前の方へ来た。）とジヨバンニが思いながら、大股にその街灯の下を通り過ぎた時、いきなり昼間のザネリが、新しい襟の尖ったシャツを着て、電灯の向こう側の暗い小路から出て来て、ひらっとジヨバンニとすれ違いました。

「ザネリ、烏瓜流しに行くの。」ジヨバンニがまだそういつてしまわないうちに、「ジヨバンニ、お父さんから、ラッコの上着が来るよ。」その子が投げつけるように後から叫びました。

ジヨバンニは、ぱっと胸が冷たくなり、そこから中キーンと鳴るよつに思いました。「なんだい、ザネリ。」とジヨバンニは高く叫び返しましたが、もうザネリは向いっ

のヒバの植った家の中へ入っていました。(ザネリは、どうして僕が何にもしないのにあんなことをいうのだろう。走る時はまるで鼠のようなくせに。僕が何にもしないのにあんなことをいうのは、ザネリがバカなからだ。)

ジヨバンニは、せわしく色々のことを考えながら、様々の灯や木の枝ですっかりきれいに飾られた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン灯が点いて、一秒ごとに石でこされたフクロウの赤い眼がクルッ、クルッと動いたり、色々な寶石が海のような色をした厚い硝子の盤に載って、星のようにゆっくり巡ったり、また向こう側から、銅の人馬がゆっくりこちへ回って来たりするのです。その真ん中に、丸い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。

ジヨバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それは、昼、学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですが、その日と時間に合わせて盤を回すと、その時出ている空がそのまま楕円形の中に巡って現れるようになっており、やはりその真ん中には、上から下へかけて銀河がボウツと煙ったような帯になって、その下の方では、微かに爆発して湯気でも上げているように見えるのでした。またその後には、二本の脚のついた小さな望遠鏡が黄色に光って立っていましたし、一番後の壁には、空中の星座を不思議な獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかっていました。(本当に、こんなようなサソリだの勇士だの空にぎっしりいるだろうか、ああ、僕はその中をどこまでも歩いてみたい。)と思ったりして、しばらくぼんやり立っていました。

それから、にわかにお母さんの牛乳のことを思いだして、ジヨバンニはその店を離れました。そして、窮屈な上着の肩を気にしながら、それでもわざと胸を張って大きく手を振って町を通って行きました。

空気は澄み切って、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街灯はみな真っ青な樅や檜の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタナスの木などは、中にたくさんの豆電灯がついて、本当に、そこらは人魚の都のように見えるのです。子供らは、みんな新しい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、「ケンタウルス、露を降らせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、楽しそうに遊んでいるのです。けれどもジヨバンニは、いつかまた深く首をたれて、そこらのにぎやかさとはまるで違ったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのです。

ジヨバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も高く星空に浮かんでいる所に来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の臭いのする薄暗い台所の前に立って、ジヨバンニは帽子を脱いで、「今晚は。」といましたら、家の中はシーンとして誰もいたようではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい。」ジヨバンニは真つすぐに立ってまた叫びました。するとしばらくたってから、年とった女の人が、どこか具合が悪いようにそろそろと出て来て、何か用かと口の中でいいました。

「あの、今日、牛乳が僕とこへ来なかったので、もらいにあがったんです。」ジヨバンニが一生懸命、勢いよくいいました。

「今、誰もいないでわかりません。明日にしてください。」その人は赤い眼の下のとこをこすりながら、ジヨバンニを見下ろしていいました。」

「おっかさんが病気なんですから、今晚でないと困るんです。」

「では、もう少ししてから来てください。」その人はもう行ってしまいいそつでした。「そつですか。ではありがとつ。」ジヨバンニはお辞儀をして台所から出ました。

十字になった町の角を曲がろうとしましたら、向こうの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六、七人の生徒らが口笛を吹いたり、笑ったりして、めいめい烏瓜の灯火を持ってやって来るのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞き覚えのあるものでした。ジヨバンニの同級の子供らだったのです。ジヨバンニは思わずドキッとして戻ろうとしましたが、思い直して、いっそ勢いよくそっちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」ジヨバンニがいわうとして、少しのどがつまったように思った時、「ジヨバンニ、ラッコの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジヨバンニ、ラッコの上着が来るよ。」すぐみんなが続いて叫びました。ジヨバンニは真つ赤になって、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎようとしましたら、その中にカムパネルラがいたのです。カムパネルラは気の毒そうに、黙って少し笑って、怒らないだろうかというようにジヨバンニの方を見ていました。

ジヨバンニは、逃げるようにその眼を避け、そしてカムパネルラの背の高い形が過ぎて行ってまもなく、みんなは、てんでに口笛を吹きました。町角を曲がる時、

振り返って見ましたら、ザネリがやはり振り返って見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて、向こうにぼんやり見える橋の方へ歩いて行ってしまったのでした。ジョバンニは、なんともいえず寂しくなって、いきなり走りだしました。すると耳に手を当てて、ワアワアといいながら片足でピョンピョン跳んでいた小さな子供らは、ジョバンニがおもしろくて駆けるのだと思って、ワアイと叫びました。まもなくジョバンニは走りだして黒い丘の方へ急ぎました。

## 五、天気輪の柱

牧場の後はゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下にぼんやり普段よりも低く連なって見えました。

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林の小道を、どんどん登って行きました。真っ暗な草や、色々な形に見える藪の茂みの間を、その小さな道が一筋白く星明かりに照らし出されてあったのです。草の中には、ピカピカ青光りを出す小さな虫もいて、ある葉は青く透かし出され、ジョバンニは、さっきみんなの持って行った烏瓜の灯りのようだとも思いました。

その真っ黒な松や榎の林を越えると、にわかにならんと空が開けて、天の川がシラシラと南から北へ渡っているのが見え、また頂の天気輪の柱も見わけられたのでした。ツリガネ草か野菊かの花が、そこら一面に夢の中からでも香り出したというように咲き、鳥が一匹、丘の上を鳴き続けながら通って行きました。

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、ドカドカする体を冷たい草に投げました。

町の灯は闇の中をまるで海の底のお宮の景色のようにともり、子供らの歌う声や口笛、切れ切れの叫び声もかすかに聞こえてくるのでした。風が遠くで鳴り、丘の草も静かにそよぎ、ジョバンニの汗で濡れたシャツも冷たくひやされました。ジョバンニは、町のはずれから遠く黒く広がった野原を見渡しました。

そこから汽車の音が聞こえてきました。その小さな列車の窓は、一列小さく赤く見え、その中にはたくさん旅人が、リンゴをむいたり、笑ったり、色々なふうにし

ていると考えますと、ジヨバンニは、もう何ともいえず悲しくなって、また眼を空に上げました。

あゝ、あの白い空の帯がみんな星だというぞ。

ところがいくら見ている、その空は、昼先生のいったような、がらんとした冷たいとこだとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やある野原のように考えられてしかたなかったのです。そして、ジヨバンニは青い琴の星が、三つにも四つにもなって、チラチラ瞬き、脚が何べんも出たり引っ込んだりして、とうとうキノコのように長く伸びるのを見ました。またすぐ眼の下の町までが、やっぱりぼんやりしたたくさんの星の集まりか一つの大きな煙かのように見えるように思いました。

## 六、銀河ステーション

そしてジヨバンニは、すぐ後の天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく蛍のように、ペカペカ消えたり灯ったりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとう、凜と動かないようになり、濃い鋼青の空の野原に立ちました。今新しく焼いたばかりの青い鋼の板のような空の野原に、真っすくにすきっと立ったのです。

するとどこかで、不思議な声が、「銀河ステーション、銀河ステーション」という声が出したと思うと、いきなり眼の前がパツと明るくなって、まるで億万の蛍烏賊の火を一ぺんに化石させて、空中に沈めたという具合、またダイヤモンド会社で値段が安くならないために、わざと取れないふりをして隠しておいた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかえして、ばらまいたというふうに、眼の前がサアッと明るくなって、ジヨバンニは思わず何べんも眼をこすってしまいました。

気がついてみると、さっきから、ゴトゴトゴトゴト、ジヨバンニの乗っている小さな列車が走り続けていたのです。本当に、ジヨバンニは夜の軽便鉄道の小さな黄色の電灯の並んだ車室に、窓から外を見ながら座っていたのです。車室の中は、青いビロードを張った腰掛けがまるでから空気で、向こうの鼠色のワニスを塗った壁には、真鍮の大きなボタンが二つ光っているのです。

すぐ前の席に、濡れたように真っ黒な上着を着た、背の高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気がつきました。そしてその子供の肩のあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰だかわかりたくてたまらなくなりました。いきなりこっちも窓から顔を出そうとした時、にわかになら子供が頭を引っ込めてこっちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。

ジヨバンニが、カムパネルラ、君は前からここにいたの、といおうと思った時、カムパネルラが、「みんなはね、ずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。」といました。

ジヨバンニは、(そうだ、僕達は、今、一緒に誘って出かけたのだ。)と思いながら、「どこかで待ってようか」といいました。するとカムパネルラは、「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎いにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかそういういながら、少し顔色が青ざめて、どこか苦しいというふうでした。するとジヨバンニも、何だかどこかに何か忘れたものがあるというふうな、おかしな気持ちが出て黙ってしまいました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直って、勢いよくいきました。

「ああしまった。僕、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれどかまわない。もうじき白鳥の停車場だから。僕、白鳥を見るなら、本当に好きだ。川の遠くを飛んでいたって、僕はきくと見える。」そしてカムパネルラは、まるい板のようになった地図を、しきりにグルグル回して見ていました。まったく、その中に白く表わされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のように真っ黒な盤の上に、一々の停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、美しい光で散りばめられてありました。ジヨバンニは、何だかその地図をどこかで見たように思いました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」ジヨバンニがいました。「銀河ステーションでもらったんだ。君もらわなかったの。」

「ああ、僕銀河ステーションを通ったろうか。今僕達のいるところ、ここだろう。」  
ジヨバンニは白鳥と書いてある駐車場のしるしのすぐ北を指しました。

「そつだ。おや、あの河原は月夜だろうか。」

そっちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀色の空のススキが、もうまるで一面、風にサラサラサラ揺られて動いて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジヨバンニはいいながらまるで跳ね上がりたくらい愉快になって、足をコツコツ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生懸命伸び上がって、その天の川の水を見極めようとしたが、はじめは、どうしてもそれがはつきりしませんでした。けれども、だんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりも透き通って、時々眼の加減か、チラチラ紫色の細かな波を立てたり、虹のようにキラッと光ったりしながら、声もなくどんどん流れて行き、野原にはあっちにもこっちにも、燐光の三角標が美しく立っていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄色ではっきりし、近いものは青白く少し霞んで、あるいは三角形、あるいは四辺形、あるいは電や鎖の形、様々に並んで、野原いっぱい光っているのです。ジヨバンニは、まるでドキドキして頭をやけに振りました。すると本当に、そのきれいな野原中の青や橙や色々輝く三角標も、てんでに息をつくようにチラチラ揺れたり震えたりしました。

「僕はもう、すっかり天の野原に来た。」ジヨバンニはいいました。

「それに、この汽車、石炭をたいていないねえ。」ジヨバンニが左手を突き出して窓から前の方を見ながらいいました。

「アルコールが電気だろう。」カムパネルラがいました。

ゴトゴトゴトゴト、その小さなきれいな汽車は、空のススキの風にひるがえる中を、天の川の水や三角点の青白い微光の中を、どこまでもどこまでもと走って行くのでした。

「ああ、リンドウの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」カムパネルラが、窓の外を指さしていました。

線路のへりになった短い芝草の中に、月長石でも刻まれたような、すばらしい紫のリンドウの花が咲いていました。

「僕、飛び降りて、あいつを取ってまた飛び乗ってみせようか。」ジヨバンニは胸を踊らせていいました。

「もうだめだ。あんなに後へ行ってしまったから。」

カムパネルラが、そういつてしまいかしまわないうち、次のリンドウの花が、いっぱい光って過ぎて行きました。と思ったら、もう次から次から、たくさんの黄色な底をもったリンドウの花のコップが、湧くように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、煙るように燃えるようにいよいよ光って立ったのです。

## 七、北十字とプリオシン海岸

「おっかさんは、僕を許してくださいさるだろうか。」いきなり、カムパネルラが思い切ったというように、少しどもりながら咳き込んでいいました。

ジヨバンニは、（ああ、そうだ、僕のおっかさんは、あの遠い一つのちりのように見える橙色の三角標のあたりにいらっしやって、今僕のことを考えているんだっ。）と思いつながら、ぼんやりして黙っていました。

「僕は、おっかさんが本当に幸になるならどんなことでもする。けれども、一体どんなことが、おっかさんの一番の幸なんだろう。」カムパネルラは、何だか泣き出したいのを一生懸命こらえているようでした。

「君のおっかさんは、何にもひどいことないじゃないの。」ジヨバンニはびっくりして叫びました。

「僕わからない。けれども、誰だって本当にいいことをしたら、一番幸なんだねえ。だから、おっかさんは僕を許してくださいさると思う。」カムパネルラは、何か本当に決心しているように見えました。



にわかには車の中がパツと白く明るくなりました。見ると、もう実に金剛石や草の露やあらゆる立派さを集めたような、きらびやかな銀河の河床の上を、水は声もなく形もなく流れ、その流れの真ん中に、ボウツと青白く後光の射した一つの鳥が見えるのでした。その島の平らな頂に、立派な目も覚めるような、白い十字架が立って、それはもう、凍った北極の雲で鑄たといったらいいか、すきっとした金色の円光をいただいで、静かに永久に立っているのです。

「ハレルヤ、ハレルヤ。」前からも後からも声が起りました。振り返って見ると、車室の中の旅人達は、みな真つすぐに着物のひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の数珠をかけたたり、どの人も慎ましく指を組み合わせてそっちに祈っているのです。思わず二人とも真つすぐに立ち上がりました。カムパネルラの頬は、まるで熟したリンゴのあかしのように美しく輝いて見えました。

そして島と十字架とは、だんだん後の方へ移って行きました。

向こう岸も青白くぼうつと光って煙り、時々、やっぱりススキが風にひるがえるらしく、さっとその銀色が煙って、息でもかけたように見え、また、たくさんのリンドウの花が草を隠れたり出たりするのは、やさしい狐火のように思われました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間はススキの列で遮られ、白鳥の島は二度ばかり後の方に見えましたが、じきもうずうつと遠く小さく絵のようになってしまいい、またススキがザワザワ鳴って、とうとうすっかり見えなくなってしまうした。ジヨバン二の後には、いつから乗っていたのか、背の高い、黒いカツギをしたカトリックふうの尼さんが、まん丸な緑の瞳をじつと真つすぐに落として、まだ何か言葉か声かそっちから伝わってくるのを、謹んで聞いているというように見えました。旅人達は静かに席に戻り、二人も胸いっぱい悲しみに似た新しい気持ち、何気なく違った言葉でそつと話し合っただけです。

「もつじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、十一時かつきりには着くんだよ。」

早くもシグナルの緑の灯りとぼんやり白い柱とがちらつと窓の外を過ぎ、それから硫黄の炎のような暗いぼんやりした転てつ機の前の灯りが窓灯りの下を通り、汽

車はだんだん緩やかになって、まもなくプラットホームの一行の電灯が美しく規則正しく現れ、それが段々大きくなって広がって、二人はちょうど白鳥停車場の大きな時計の前に来て止まりました。

さわやかな秋の時計の盤面には、青くやかれた鋼の二本の針がくっきり十一時を指しました。みんなはいっぺんに降りて、車室の中はガランとなってしまいました。二十分停車と時計の下に書いてありました。

「僕達も降りて見ようか。」ジヨバンニがいました。  
「降りよう。」

二人は、一度に跳ね上がってドアを飛び出して改札口へ駆けて行きました。ところが改札口には、明るい紫がかった電灯が一つ点いているばかり、誰もいませんでした。そこから中を見ても、駅長や赤帽らしい人の影もなかったのです。

二人は、停車場の前の水晶細工のように見える銀杏の木に囲まれた小さな広場に出ました。そこから幅の広い道が真っすぐに銀河の青光の中へ通っていました。

先に降りた人達は、もうどこへ行ったか一人も見えませんでした。二人がその白い道を肩を並べて行きますと、二人の影は、ちょうど四方に窓のある部屋の中の二本の柱の影のように、また二つの車輪の輻のように、幾本も幾本も四方へ出るのです。そして間もなく、あの汽車から見えたきれいな河原に來ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ手のひらに広げ、指でキシキシさせながら、夢のようにいつているのです。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そっだ。」どこで僕はそんなことを習ったろうと思しながら、ジヨバンニもぼんやり答えています。

河原の小石はみんな透き通って、確かに水晶や黄玉や、またクシヤクシヤの皺曲をあらわしたのや、また角から霧のような青白い光を出す鋼玉やらでした。ジヨバソニは、走ってその渚に行つて、水に手を浸しました。けれども、怪しいその銀河の水は、水素よりもっと透き通っていたのです。それでも確かに流れていたことは、二人の手首の、水に浸ったところが、少し水銀色に浮いたように見え、その手首にぶつかってできた波は、美しい燐光をあげて、チラチラと燃えるように見えたのでもわかりました。

川上の方を見ると、ススキのいっばいに生えている崖の下に、白い岩がまるで運動場のように平に川に沿って出ているのです。そこに小さな五、六人の人影が、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立ったり屈んだり時々何かの道具がピカッと光ったりしました。

「行つてみよう。」二人はまるで一度に叫んでそっちの方へ走りました。その白い岩になったところの入口に、プリオシン海岸という瀬戸物のツルツルした標札が立つて、向こうの渚には所々細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長い先の尖ったクルミの実のようなものを拾いました。

「クルミの実だよ。そら、たくさんある。流れてきたんじゃない。岩の中に入ってるんだ。」

「大きいねこのクルミ。倍あるね。こいつは少しも傷んでない。」  
「早くあそこへ行つて見よう。きっと何か掘ってるから。」

二人はギザギザの黒いクルミの実を持ちながら、またさっきの方へ近よって行きました。左手の渚には波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、一面銀や貝殻でこさえたようなススキの穂がゆれたのです。

だんだん近づいて見ると、一人の背の高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、つるはしを振り上げたがり、スコップを使つたりしている三人の助手らしい人たちに夢中で色々指図をしていました。

「その、その突起を壊さないように、スコップを使いたまえ、スコップを。おっと、もう少し遠くから掘って。いけない、いけない、なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が横に倒れて潰れたというふうになって、半分以上掘り出されていました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄の二つある足跡のついた岩が四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君達は参観かね。」その大学士らしい人が眼鏡をキラッとさせて、こつちを見て話しかけました。

「クルミがたくさんあったろう。それはまあ、ざっと百二十一年ぐらい前のクルミだよ。ごく新しい方さ。ここは百二十万年前、第三紀の後の頃は、海岸でね、この下からは貝殻も出る。今、川の流れているところに、そっくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。この獣かね、これはボスといってね、おいおい、そこ、つるはしはよしたまえ。丁寧にノミでやってくれたまえ。ボスといってね、今の牛の先祖で、昔はたくさんいたのさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するにいるんだ。僕らから見ると、ここは厚い立派な地層で百二十万年位前にできたという証拠も色々上がるけれども、僕らと違った奴から見ても、やっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えやしないかということなのだ。わかったかい。けれども、おいおい、そこもスコップではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてるはずじゃないか。」

大学士はあわてて走って行きました。

「もう時間だよ、行こう。」カムパネルラが地図と腕時計とを比べながらいいました。

「ああ、では私どもは失礼いたします。」ジヨバンニは丁寧に大学士におじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら。」大学士は、また忙しそうにあちこち歩きまわって

監督をはじめました。二人は、その白い岩の上を一生懸命汽車に遅れないように走りまわりました。そして本当に風のように走れたのです。息も切れず膝も熱くなりませんでした。

こんなにして駆けるなら、もう世界中だって駆けると、ジヨバンニは思いました。そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電灯がだんだん大きくなって、間もなく二人は、もとの車室の席に座って、今行って来た方を窓から見ていました。

## 八、鳥を捕る人

「ここへかけてもよむついでいますか。」

ガサガサした、けれども親切そうな大人の声が二人の後で聞こえました。

それは、茶色の少しボロボロの外套を着て、白い布で包んだ荷物を二つに分けて肩に掛けた、赤ひげの背中のかがんだ人でした。

「ええ、いいんです。」ジヨバンニは、少し肩をすぼめてあいさつしました。その人は、ひげの中でかすかに微笑いながら荷物をゆっくり網棚にのせました。ジヨバンニは、何か大変寂しいような、悲しいような気がして、だまって正面の時計を見ていましたら、ずうっと前の方で、硝子の笛のようなものが鳴りました。汽車はもう、静かに動いていたのです。カムパネルラは、車室の天井をあちこち見ていました。その一つの灯りに黒い甲虫がとまって、その影が大きく天井に映っていたのです。赤ひげの人は、何か懐かしそうに笑いながら、ジヨバンニやカムパネルラの様子を見ていました。汽車はもうだんだん早くなって、ススキと川と、代わる代わる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおずおずしながら二人に聞きました。

「あなた方はどちらにいらっしやるのですか。」

「どこへでも行くんです。」「ジヨバンニは、少しきまり悪そうに答えました。」

「それはいいね。この汽車は、実際、どこまででも行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラがいきなり喧嘩のようにたずねましたので、ジョバンニは思わず笑いました。

すると、向こうの席にいた、尖った帽子を被り、大きな鍵を腰に下げた人も、チラッとこっちを見て笑いましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑い出してしまいました。ところが、その人は別に怒ったでもなく、頬をピクピクしながら返事をしました。

「わっしは、すぐそこで降ります。わっしは、鳥を捕まえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁です。鷺も白鳥もです。」

「鶴はたくさんいますか。」

「いますとも。さっきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか。」

「うんえ。」

「今でも聞こえるじゃありませんか。そろ、耳をすまして聞いてもらんなさい。」

二人は眼を上げ、耳をすましました。ゴトゴト鳴る汽車の響きと、スキの風との間から、「ロン」ロンと水の湧くような音が聞こえてくるのでした。

「鶴、どうして捕るんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」ジョバンニは、どっちでもいいと思いつながら答えました。

「そいつはな、雑作ない。鷺というものは、みんな天の川の砂が凝ってぼおっとできるもんですからね。そして、始終川へ帰りますからね。川原で待っていて、鷺がみんな、脚をこつこつこつこつにして降りて来るところを、そいつが地べたへ着くか着かないうちに、ピタッと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまって安心して死にまいます。後は、もう、わかり切ってますあ。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本じゃありません。みんな食べるじゃありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審ありませんや。そろ。」その男は立って網棚から包みを下ろして、手ばやくクルクルと解きました。

「さあ、ご覧なさい。今捕ってきたばかりです。」

「本当に驚だねえ。」二人は思わず叫びました。真っ白な、あのさっきの北の十字架のように光る鷺の体が、十ばかり少し平べったくなくなって、黒い脚を縮めて浮彫りのように並んでいたのです。

「眼をつぶってるね。」カムパネルラは、指でそっと鷺の三日月型の白いつぶった眼に触りました。頭の上の槍のような白い毛もちゃんとついていました。

「ね、そつでしよう。」鳥捕りは風呂敷を重ねて、またクルクルと包んで紐でくりました。(誰がいったいどこかで鷺なんぞ食べるだろう。)とジヨバンニは思いながら聞きました。

「鷺はおいしいんですか。」

「ええ、毎日注文があります。しかし雁の方がもっと売れます。雁の方がずっと柄がいいし、第一手数がありませんからな。そら。」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると、黄と青白とまだらになって、何かの灯りのように光る雁が、ちよつとさっきの鷺のように、くちばしをそろえて、少し平べったくなくなって、並んでいました。

「こっちはすぐ食べられます。どつです、少しおあがりなさい。」鳥捕りは、黄色の雁の足を軽く引っぱりました。するとそれは、チヨ「シートでも出来ているように、すっときれいに離れました。

「どつです。すこし食べてもらいなさい」鳥捕りは、それを二つにちぎって渡しました。ジヨバンニはちよつと食べてみて、(なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。チヨ「シートよりもっとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそこらの野原の菓子屋だ。けれども、僕はこの人を馬鹿にしながらこの人のお菓子を食べているのは、大変気の毒だ。)と思いながら、やっぱりポクポクそれを食べていました。

「も少しおあがりなさい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジヨバンニはもっと食べたかったのですけれども、「ええ、ありがとう。」といって遠慮したら、鳥捕りは今度は向こうの席の鍵を持った人に出しました。

「いや、商売ものをもらっちゃ、すみませんな。」その人は、帽子を取りました。

「いいえ、どついたしました。どつです、今年の渡り鳥の景気は。」

「いや、素敵なもんですよ。おとこの第二限頃なんか、なぜ灯台の灯を規則以外に間「一字空白」させるかって、あつちからもこつちからも電話で故障がきました。が、なあに、こつちがやるんじゃないやなくて、渡り鳥どもが真っ黒にかたまつてあかしの前を通るのですからしかたありませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、俺のどこへ持って来たってしかたがねえや、バサバサのマントを着て脚と口との途

方もなく細い大将へやれ。』って、こついつてやりましたがね、はっは。」

ススキがなくなつたために、向こうの野原からパツと明かりが射してきました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか。」「カムパネルラはさつきから聞こうと思つていたのです。」

「それはね、鷺を食べるには、」鳥捕りはこっちに向き直りました。「天の川の水あかりに十日も吊るしておくかね、そうでなければ、砂に三、四日埋めなければいけないだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して食べられるようになるよ。」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。」「やっぱり同じ事を考えていたとみえて、カムパネルラが思い切つたというように尋ねました。鳥捕りは何か大変慌てたふつで、「そうそう、ここで降りなければ。」「いいながら、立つて荷物を取つたと思うと、もう見えなくなっていました。」

「どこへ行つたんだらう。」「二人は顔を見合わせましたら、灯台守はニヤニヤ笑つて、少し伸び上がるようにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつた今の鳥捕りが、黄色と青白の美しい燐光を出す一面の力ワラハハコ草の上に立つて、真面目顔をして両手を広げて、じつと空を見ていたのです。」

「あそこへ行つてる。ずいぶん奇体だねえ。きつとまた鳥を捕まえるよごだねえ。汽車が走って行かないうちに早く鳥が降りるといいな。」といったとたん、がらんとした枯梗色の空からさつき見たような鷺がまるで雪の降るように、ギャアギャア叫びながら、いっぱい舞い降りて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにホクホクして、両足をかきり六十一度にかけて立つて、鷺の縮めて降りて来る黒い脚を両手で片っぱしから押えて、布の袋の中に入れるのでした。すると、鷺は蛍のように袋の中でしばらく青くペカペカ光ったり、消えたりしていましたが、お終いとつとつ、みんなぼんやり白くなって、眼をつぶるのでした。ところが、捕まえられる鳥よりは、捕まえられないで無事に天の川の砂の上に降りるものの方が多かつたのです。それは、見ていると、足が砂へ着くや否や、まるで雪の解けるように、縮まって平べったくなって、まもなく溶鉱炉から出た銅の汁のように、砂や砂利の上に広がり、しばらくは鳥の形が砂についているのですが、それも二、三度明るくなつたり暗くなつたりしているうちに、もつすっかり周りと同じ色になつてしまふのでした。



鳥捕りは、二十匹ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手を上げて、兵隊が鉄砲弾に当たって死ぬ時のような形をしました。と思ったり、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、かえつて、「ああ、せいせいした。どうも体にちょうと合つほど稼いでいるくらいいいことはありませんな。」という聞き覚えのある声がジヨバンニの隣りにしました。見ると鳥捕りは、もうそこで捕つて来た鷺をきちんとそろえて一つずつ重ね直しているのです。

「どうして、あそこからいつペンにここへ来たんですか。」ジヨバンニが、何だか当たり前のような、当たり前でないような、おかしな気がして問いました。

「どうして、来ようとしたから来たんです。全体あなた方は、どちらからおいでですか。」

ジヨバンニは、すぐ返事をしようと思いましたが、さあ、全体どこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔をまっ赤にして何か思い出そうとしているのです。

「ああ、遠くからですね。」鳥捕りは、わかったというように雑作なくうなずきました。

## 九、ジヨバンニの切符

「もうついに白鳥区のお終いです。ご覧なさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、天の川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼もさめるようなサファイアとトパーズの大きな二つの透き通った球が輪になって、静かにクルクルと回っていました。黄色のがだんだんむこうへ回って行って、青い小さいのがこっちへ進んでいき、まもなく二つの端は重なり合つて、きれいな緑色の画面凸レンズの形を作り、それもだんだん真ん中が膨らみだして、とうとう青いのはすっかりトパーズの正面に came したので、緑の中心と黄色な明るい環とができました。それがまただんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆にくり返し、とうとうすっと離れてサファイアは向こうへめぐり、黄色のはこっちへ進み、またちょうとさっきのようなふうになりま

した。銀河の形もなく音もない水に囲まれて、本当にその黒い測候所が眠っているように静かに横たわったのです。

「あれは、水の速さを計る機械です。水も……」鳥捕りが言いかけた時、「切符を拜見いたします。」二人の席の横に赤い帽子を被った背の高い車掌が、いつか真っすぐに立っていて、いいました。鳥捕りは黙って隠しから小さな紙切れを出しました。車掌はちよっと見てすぐ眼をそらして、「あなた方のは？」というように指を動かしながら手をジヨバン二達の方へ出しました。

「さあ、」ジヨバン二は困ってモジモジしていましたら、カムパネルラはわけもないというふうで、小さな鼠色の切符を出しました。ジヨバン二はすっかり慌ててしまつて、もしか上着のポケットにでも入っていたかと思いつきながら手を入れてみましたら、何か大きなたんだ紙切れにあたりました。こんなもの入っていたらどうかと思つて急いで出してみましたら、それは四つに折つた葉書ぐらいの大きさの緑色の紙でした。車掌が手を出しているもんですから、何でもかまわない、やっちなえと思つて渡しましたら、車掌は真つすぐに立ち直つて丁寧にそれを開いて見ていました。そして読みながら上着のボタンやなんかしきりに直したりしていましたし、灯台看守も下からそれを熱心にのぞいていましたから、ジヨバン二は、確かにあれは証明書か何かだつたと考えて、少し胸が熱くなるような気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか。」車掌がたずねました。

「何だかわかりません。」もう大丈夫だと安心しながらジヨバン二はそつちを見あげてクツクツ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは次の第三時頃になります。」車掌は紙をジヨバン二に渡して向こうへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だつたか、待ちかねたというように急いでのできこみました。ジヨバン二も全く早く見たかつたのです。ところが、それは一面黒い唐草のような模様の中におかしな十ばかりの字を印刷したもので、黙って見ていると、何だかその中へ吸い込まれてしまうような気がするのです。すると鳥捕りが横からチラッとそれを見て慌てたようにいいました。

「おや、こいつはたいしたもんですぜ。こいつはもう、本当の天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手に歩ける通行券です。こいつをお持ち

になれあ、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行けるはずでさあ、あなた方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジヨバンニが赤くなって答えながらそれを又畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと二人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕りの、時々大したもんだというように、ちらちらこっちを見ているのがぼんやりわかりました。

「もつじき鷺の停車場だよ。」カムパネルラが向う岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と地図とを見くらべていいました。

ジヨバンニはなんだかわけもわからずに、にわかに隣の鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。鷺をつかまえてせいせいしたと喜んだり、白い着れでそれをくるくる包んだり、人の切符をびくりしたように横目で見て、あわててほめたしたり、そんなことをいちいち考えていると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジヨバンニの持っているものでも食べるものでもなんでもやっつけてしまいたい、もうこの人の本当の幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立って百年続けて立って鳥を捕ってやってもいいというような気がして、どうしてももう黙っていられなくなりました。本当にあなたの欲しいものは一体何ですかと聞かして、それではあんまり出し抜ぬげだから、どうしようかと考えて振返って見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。網棚の上には白い荷物も見えなかったのです。また窓の外で足をふんばって空を見上げて鷺を捕る支度をしているのかと思って、急いでそっちを見ましたが、外は一面の美しい砂子と白いスキの波ばかり、あの鳥捕りの広い背中もどがった帽子も見えませんでした。

「あの人がどこへ行ったろう。」カムパネルラもぼんやりそういつていました。

「どこへ行ったろう。一体どこでまた会っただろう。僕はどつして少しもあの人に物をいわなかったろう。」

「ああ、僕もそう思っているよ。」

「僕はこの人が邪魔なような気がしたんだ。だから僕は大変つらい。」ジヨバンニはこんな変てこな気持ちは、本当にはじめてだし、こんなこと今までいったこともないと思いました。

「何だかりんごの匂いがする。僕いまりんごのこと考えたためだろうか。」カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうにりんごの匂いだよ。それから野茨の匂いもする。」ジヨバンニもそこらを見ましたがやっぱりそれは窓からでも入って来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂いのする筈はないとジヨバンニは思いました。

そしたらにわかそこに、つやつやした黒い髪の六つばかりの男の子が赤いジャケツトのボタンもかけずびどくびどくりしたような顔をしてがたがたふるえてはだしで立っていました。隣には黒い洋服をきちんと着た背の高い青年が、いっぱいに風に吹かれているけやきの木のような姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立っていました。

「あり、ふじふじでしょう。まあ、きれいだわ。」青年の後に、もう一人、十二ばかりの眼の茶色な可愛らしい女の子が、黒い外套を着て青年の腕にすがって不思議そうに窓の外を見ているのでした。

「ああ、ここはランカシャーだ。いや、コネクカット州だ。いや、ああ、僕は空へ来たのだ。私達は天へ行くのです。ご覧なさい。あの標は天上の標です。もう何にも恐いことありません。私達は神様に召されているのです。」黒服の青年は喜びに輝いてその女の子にいました。けれども、なぜかまた額に深く皺を刻ざんで、それに大変疲れているらしく、無理に笑いながら男の子をジヨバンニの隣に座らせました。それから女の子に優しくカムパネルラの隣の席を指差しました。女の子は素直にそこへ座って、きちんと両手を組み合わせました。

「僕、大姉さんのところへ行くんだよう。」腰掛けたばかりの男の子は顔を変にして灯台看守の向こうの席に座ったばかりの青年にいました。青年は何ともいえず悲しそうな顔をして、じっとその子の縮れた濡れた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔に当ててシクシク泣いてしまいました。

「お父さんやきくよ姉さんは、まだいろいろお仕事があるのです。けれども、もうすぐ後からいらっしやいます。それよりも、おっかさんはどんなに長く待っていらっしやったでしょう。私の大事なタダシは、今どんな歌を歌っているだろう。雪の降る朝にみんなと手をつないで、ぐるぐる庭とこの藪を回って遊んでいるだろうかと

考えたり、本当に待って心配していらっしやるんですから、早く行って、おっかさ  
んにお目にかかりましょね。」

「うん、だけど僕、船に乗りなけあよかったなあ。」

「ええ、けれど、ご覧なさい。そら、どうです。あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、  
ツインクル、ツインクル、リトル、スターを歌って休む時、いつも窓からぼんやり  
白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょ。あんなに光ってい  
ます。」

泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教えるようにそっと  
姉弟にまたいいました。

「私達は、もう何にも悲しいことないのです。私達は、こんないいところを旅して、  
じき神様のところへ行きます。そこならもう、本当に明るくておいがよくて立派な  
人達でいっぱいです。そして、私達の代わりにボートへ乗れた人達は、きっとみん  
な助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へ  
やら行くのです。さあ、もうじきですから、元氣を出しておもしろく歌って行きま  
しょう。」青年は男の子の濡れたような黒い髪をなで、みんなを慰めながら自分もだ  
んだん顔色が輝いてきました。

「あなた方はどちらからいらっしやったのですか。どうなすったのですか。」さつき  
の灯台看守がやっと少しわかったように青年にたずねました。青年は微かに笑いまし  
た。

「いえ、氷山にぶつつかって船が沈みましてね、私達は、こちらのお父さんが急な  
用で、二か月前、一足先に本国へお帰りになったので、後から発ったのです。私は大  
学へ入っていて、家庭教師に雇われていたのです。ところが、ちょうど十二日、今  
日か昨日のあたりです、船が氷山にぶつかっていっぺんに傾き、もう沈みかけました。  
月の明かりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったのです。ところが、  
ボートは左舷の半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らない  
のです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となって、どうか小さな人たち  
を乗せてくださいと叫びました。近くの人達はすぐ道を開いて、そして子供達のため  
に祈ってくれました。けれども、そこからボートまでのところには、まだまだ小さな  
子供達や親達やなんかいて、とても押しのける勇気がなかったのです。それでも、私  
はどうしてもこの方達をお助けするのが私の義務だと思いましたから、前にいる子供

らを押しつけようと思いました。けれどもまた、そんなにして助けてあげるよりは、このまま神の御前にみんなで行く方が本当にこの方たちの幸福だとも思いました。それからまた、その神に背く罪は、私一人でしよってせひとも助けてあげようと思いましたが、けれども、どうしても見ているとそれが出来ないのです。子どもばかりのボートの中へ放してやって、お母さんが狂気のようにキスを送り、お父さんが悲しいのをじっとこらえて真っすぐに立っているなど、とてももう腸もちぎれるようでした。そのうち船はもうズンズン沈みますから、私達はかたまつて、もうすっかり覚悟して、この人達二人を抱いて、浮かべるだけは浮かぼうと船の沈むのを待っていました。誰が投げたかライフブイが一つ飛んで来ましたけれども、滑ってずうっと向こうへ行っしまいました。私は一生懸命で、甲板の格子になったところを離して、三人それにしっかり取り付きました。どこからともなく三〇六番の声がかりました。たちまちみんなは、色々な国語でいっぺんにそれを歌いました。その時、にわかに大きな音がして私達は水に落ち、もう渦に入ったと思ひながらすっかりこの人達を抱いて、それからボウツとしたと思ったら、もうここへ来ていたのです。この方達のお母さんは一昨年亡くなられました。ええ、ボートはぎつと助かったに違いありません、なにせ、よほど熟練な水夫達が漕いで、すばやく船から離れていましたから。」

そこから小さな嘆息や祈りの声が聞こえ、ジヨバンニもカムパネルラも今まで忘れていた色々なことをぼんやり思い出して眼が熱くなりました。

（ああ、その大きな海はパシフィックといつのではなかったらうか。その氷山の流れる北の果ての海で、小さな船に乗って風や凍りつく潮水や、激しい寒さと闘って、誰かが一生懸命働いている。僕はその人に本当に気の毒で、そしてすまないような気がする。僕は、その人の幸いのために一体どうしたらいいのだろう。）ジヨバンニは首をたれて、すっかりふさぎ込んでしまいました。

「何が幸せかわからないです。本当にどんなつらいことでも、それが正しい道を進む中での出来事なら、峠の上りも下りもみんな本当の幸福に近づく一足ずつです。」「灯台守が慰めていました。

「ああそうです。ただ一番の幸いに至るために、色々な悲しみもみんな思し召しです。」「青年が祈るようにそう答えました。

そしてあの姉弟は、もう疲れてめいめいぐったり席によりかかって眠っていました。さっきのあの裸足だった足には、いつか白い柔らかな靴を履いていたのです。

「ゴトゴトゴトゴト自動車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向こうの方の窓を見ると、野原はまるで幻灯のようでした。百も千もの大小さまざまな三角標、その大きなものの上には赤い点々を打った測量旗も見え、野原の果ては、それらが一面、たくさんたくさん集まってポオツと青白い霧のよう、そこからか、またはもっと向こうからか、時々様々の形のぼんやりした狼煙のようなものが、代わる代わるきれいな桔梗色の空に打ち上げられるのです。実にその透き通ったきれいな風は、バラのにおいでいっぱいでした。」

「いかがですか。こういうリングは、おはじめてでしょう。」「向こうの席の灯台看守がいつか黄金と紅で美しく彩られた大きなリングを落とさないように両手で膝の上を抱えていました。」

「おや、どこから来たのですか。立派ですねえ。ここらではこんなリングができるのですか。」「青年は本当びっくりしたらしく、灯台看守の両手に抱えられた一盛りのリングを、眼を細くしたり首を曲げたりしながら、我を忘れて眺めていました。」

「いや、まあお取り下さい。どうか、まあお取り下さい。」「青年は一つ取ってジヨバンニ達の方をちょっと見ました。」

「さあ、向こうの坊ちゃんがた。いかがですか。お取りください。」「ジヨバンニは坊ちゃんといわれたので、少ししゃくにさわって黙っていました。カムパネルラは、「ありがとうございます。」「といいました。すると青年は、自分で取って一つずつ二人に送ってよこしましたので、ジヨバンニも立って、「ありがとうございます。」「といいました。」

灯台看守はやっと両腕があいたので、今度は自分で一つずつ眠っている姉弟の膝にそっと置きました。

「でもありがとうございます。」「どこまでできるのですか。こんな立派なリングは。」「青年はつくづく見ながらいいました。」

「この辺では、もちろん農業はいたしますけれども、たいてい、ひとりでいいものができるとな約束になっております。農業だつてそんなに骨は折れはしません。たいてい自分の望む種子さえ播けば、ひとりでにどんどんできます。米だつてパンフィック辺のように殻もないし、十倍も大きくてにおいもいいのです。けれども、あなたがたのいらっしやる方なら、農業はもうありません。リンゴだつてお菓子だつて、かすが少しもありませんから、みんなその人その人によって違ったわずかのいい香りになって毛穴からちらけてしまうのです。」

にわかにも男の子がぱっちり眼を開いていいました。

「ああ僕、今お母さんの夢をみていたよ。お母さんがね、立派な戸棚や本のあるところにいてね、僕の方を見て手を出してニコニコニコニコ笑つたよ。僕、『お母さん、リンゴを拾ってきてあげましょうか。』といつたら眼がさめちゃつた。ああここ、さっきの汽車の中だねえ。」

「そのリンゴがそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ。」青年がいいました。

「ありがとつおじさん。おや、かおる姉さんまだ寝てるねえ、僕起こしてやろう。姉さん。ご覧、リンゴを貰つたよ。起きてごらん。」

姉は笑つて眼を覚まし、眩しそつに両手を眼に当てて、それからリンゴを見ました。男の子はまるでパイを食へるように、もつそれを食べていました。また折角むいたそのきれいな皮も、くるくる「ルルク抜きのような形になって床へ落ちるまでの間には、すつと、灰色に光つて蒸発してしまつたのです。

二人はリンゴを大切にポケットにしまいました。

川下の向こう岸に青く茂つた大きな林が見え、その枝には熟して真っ赤に光る丸い実がいっぱい、その林の真ん中に高い高い三角標が立つて、森の中からはオーケストラベルやジロフォンに混じつて、何ともいえずきれいな音色がとけるように浸みるように風につれて流れてくるのです。

青年はぞくつとして、体をふるつぷりつしました。

黙つてその譜を聞いていると、そこらに一面、黄色や薄い緑の明るい野原か敷物



かが広がり、また真っ白な蠟のような露が太陽の面をかすめて行くように思われました。

「まあ、あのカラス。」カムパネルラの隣のかおると呼ばれた女の子が叫びました。「カラスでない。みんなカササギだ。」カムパネルラがまた何気なく叱るように叫びましたので、ジヨバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうにしました。まったく河原の青白い灯りの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱい列になって止まって、じつと川の微光を受けているのです。

「カササギですねえ、頭の後のところに毛がピンと延びてますから。」青年は取りなすようにいいました。

向こうの青い森の中の三角標は、すっかり汽車の正面にきました。その時、汽車のずうっと後の方から、あの聞きなれた三〇六番の讚美歌の節が聞こえてきました。よほどの人数で合唱しているらしいのです。青年はさっと顔色が青ざめ、立っていっぺんそっちへ行きそうにしましたが、思い返してまた座りました。かおる子は、ハンケチを顔にあててしまいました。ジヨバンニまで何だか鼻が変になりました。けれども、いつももなく誰ともなくその歌は歌い出され、段々はつきり強くなりました。思わずジヨバンニもカムパネルラもいっしょに歌いだしたのです。

そして青い橄欖の森が、見えない天の川の向こうにさめざめと光りながら、段々後の方へ行ってしまい、そこから流れて来る怪しい楽器の音も、もう汽車の響きや風の音にすり減らされて、ずうっと微かになりました。

「あ、孔雀がいるよ。あ、孔雀がいるよ。」

「ええ、たくさんいたわ」女の子がこたえました。

ジヨバンニは、その小さく小さくなって、今はもう一つの緑色の貝ボタンのように見える森の上に、サツサツと青白く時々光って、その孔雀が羽を広げたり閉じたりする光の反射を見ました。

「そつだ、孔雀の声だってさつき聞こえた。」カムパネルラが、女の子にいいました。

「ええ、二十四匹は確かにいたわ。」女の子が答えました。

ジヨバンニは、にわかになんともいえず悲しい気がして、思わず、「カムパネルラ、

ここから跳ね降りて遊んで行こうよ。」と恐い顔をしていおうとしたくらいでした。

川は二つに分かれました。その真つ暗な島の真ん中に、高い高い櫓が一つ組まれて、その上に、一人の寛い服を着て赤い帽子を被った男が立っていました。そして、両手に赤と青の旗を持って、空を見上げて信号しているのです。ジヨバンニが見ている間、その人はしきりに赤い旗を振っていました。にわかには赤旗を下ろして後に隠すようにし、青い旗を高く高く上げて、まるでオーケストラの指揮者のように激しく振りました。すると空中にザアツと雨のような音がして、何か真つ暗なものが、幾かたまりも、幾かたまりも、鉄砲丸のように川の向こうの方へ飛んで行くのです。ジヨバンニは、思わず窓から体を半分出してそっちを見あげました。美しい、美しい、桔梗色のガランとした空の下を、実に何万という小さな鳥どもが、幾組も幾組も、めいめいせわしくせわしく鳴いて通って行くのです。

「鳥が飛んで行くな。」ジヨバンニが窓の外でいいました。

「どう。」カムパネルラも空を見ました。

その時、あの櫓の上のゆるい服の男は、にわかには赤い旗を上げて狂気のように振り動かしました。すると、ピタツと鳥の群れは通らなくなり、それと同時にピシャンという潰れたような音が川下の方で起こって、それからしばらくシーンとしました。と思つたら、あの赤帽の信号手がまた青い旗を振って叫んでいたのです。

「今こそ渡れ渡り鳥、今こそ渡れ渡り鳥。」その声ははっきり聞こえました。それといっしょに、また幾万という鳥の群れが空を真つすぐに駈けたのです。二人の顔を出している真ん中の窓から、あの女の子が顔を出して、美しい頬を輝かせながら空を仰ぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあ空のきれいなこと。」女の子はジヨバンニに話かけましたけれども、ジヨバンニは生意気な、嫌だいたいと思いながら、黙って口を結んで空を見あげていました。女の子は小さくホツと息をして、黙って席へ戻りました。カムパネルラが、気の毒そうに窓から顔を引っ込めて地図を見ていました。

「あの人、鳥へ教えてるんでしょうか。」女の子がそっとカムパネルラにたずねました。

「渡り鳥へ信号してるんです。きっと、どこからか狼煙が上がるためでしょう。」

カムパネルラが少しおぼつかないように答えました。そして、車の中はシーンとなりました。ジヨバンニは、もう頭を引っ込めたかったのですけれども、明るいとこへ顔を出すのがつらかったので、黙ってこらえてそのまま立って口笛を吹いています。

（どうして僕はこんなに悲しいのだろう。僕はもっと心持ちをきれいに大きく持たなければいけない。あすこの岸のずうっと向こうに、まるで煙のような小さな青い火が見える。あれは、本当に静かで冷たい。僕はあれをよく見て心持ちを静めろんだ。）ジヨバンニは熱くて痛い頭を両手で押えるようにして、そっちの方を見ました。（ああ本当に、どこまでもどこまでも僕と一緒に行く人はないだろうか。カムパネルラだって、あんな女の子とおもしろそうに話しているし、僕は本当に辛いなあ。）ジヨバンニの眼は、また涙で一杯になり、天の川もまるで遠くへいったようにぼんやり白く見えるだけでした。

その時、汽車は段々川から離れて崖の上を通るようになりました。向こう岸もまた黒い色の崖が川の岸を下流に下るにしたがって、段々高くなっていくのでした。そして、チラツと大きなトウモロコシの木を見ました。その葉はグルグルに縮れ、葉の下には、もう美しい緑色の大きな苞が赤い毛を吐いて真珠のような実もチラツと見えたのでした。それは、段々数を増してきて、もう今は列のように崖と線路との間に並び、思わずジヨバンニが窓から顔を引っ込めて、向こう側の窓を見ました時は、美しい空の野原の地平線の果てまで、その大きなトウモロコシの木がほとんど一面に植えられて、サヤサヤ風に揺らぎ、その立派な縮れた葉の先からは、まるで昼の間にいっぱい日光を吸った金剛石のように露がいっぱいについて、赤や緑やキラキラ燃えて光っているのです。カムパネルラが、「あれトウモロコシだねえ。」とジヨバンニにいましたけれども、ジヨバンニは、どうしても気持ち直りませんでしたから、ただぶっきらぼうに野原を見たまま、「そうだろう。」と答えました。その時、汽車は段々静かになって、いくつかのシグナルと転轍器の灯を過ぎ、小さな停車場に止まりました。

その正面の青白い時計は、かっきり第二時を示し、風も無くなり汽車も動かず、静かな静かな野原の中に、その振り子はカチツカチツと正しく時を刻んでいくのでした。

そして、全くその振り子の音の絶え間を、遠くの遠くの野原の果てから微かな微

かな旋律が、糸のように流れて来るのでした。「新世界交響楽たわ。」向こうの席の姉が独り言のようにこつちを見ながらそつといいました。全くもう車の中では、あの黒服の丈高い青年も、誰も、みんなやさしい夢を見ているのでした。

（こんな静かないいところで、僕は、どうしてもつと愉快になれないだろう。どうしてこんなに一人寂しいのだろう。けれども、カムパネルなんかあんまりひどい。僕と一緒に汽車に乗っていないながら、まるであんな女の子とばかり話しているんだもの。僕は本当にこつらい。）

ジヨバンニは、また手で顔を半分隠すようにして、向こうの窓の外を見つめていました。透き通った硝子のような笛が鳴って、汽車は静かに動きだし、カムパネルも寂しそつに星めぐりの口笛を吹きました。

「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。」後の方で誰か年寄りらしい人の、今眼が覚めたというふうで、ハキハキ話している声がしました。

「トウモロコシだって、棒で二尺も穴をあけておいて、そこへ播かないと生えないんです。」

「そつですか。河まではよほどありましたよつかねえ。」

「ええ、ええ、河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどい峡谷になっているんです。」

そつそつ、ここはコロラドの高原じゃなかったらつか、ジヨバンニは思わずそつ思いました。あの姉は、弟を自分の胸に寄りかからせて眠らせながら、黒い瞳をうつとりと遠くへ投げて、何を見るでもなしに考え込んでいたのでしたし、カムパネルは、まださびしそつに一人口笛を吹き、男の子はまるで綿で包んだリンゴのような顔色をしてジヨバンニの見る方を見ているのでした。突然トウモロコシが無くなって、大きな黒い野原がいっぱいに開けました。新世界交響楽は、いよいよはっきり地平線の果てから湧き、その真つ黒な野原の中を、一人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけ、たくさんの石を腕と胸に飾り、小さな弓に矢をつがえて一目散に汽車を追ってくるのでした。

「あら、インデアンですよ、インデアンですよ。おね姉様、ご覧なさい。」黒服の青年も眼を覚ましました。ジヨバンニもカムパネルも立ち上がりました。

「走って来るわ、あら、走って来るわ。追いかけているんですよ。」

「いいえ、汽車を追ってるんじゃないんですよ。猫をするか踊るかしてるんですよ。」青年は、今どこにいるか忘れたというふうにはポケットに手を入れて、立ちながらいいました。

まったく、インデアンは半分は踊っているようでした。第一、駆けるにしても足の踏みようが、もっと経済もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくっきり白いその羽根は、前の方へ倒れるようになり、インデアンはぴたっと立ち止まって、素早く弓を空に引きました。そこから一羽の鶴がふらふらと落ちて来て、また走り出したインディアンの大きくひろげられた両手に落ち込みました。インデアンは、うれしそうに立って笑いました。そして、その鶴を持ってこっちを見ている影も、もうほとんど小さく遠くなり、電信柱の碍子がキラッキラッと続いて二つばかり光って、またトウモロコシの林になってしまいました。こっち側の窓を見ますと、汽車は本当に高い高い崖の上を走っていて、その谷の底には、川がやっぱり幅広く明るく流れていたのです。

「ええ、もうこの辺から下りです。何せ、今度は一変にあの水面まで降りて行くんですから、容易じゃありません。この傾斜があるもんですから、汽車は決して向こうからこっちは来ないんです。そら、もう段々早くなったでしょう。」さっきの老人らしい声がいいました。

ドンドンドンドン汽車は下りて行きました。崖の端に鉄道がかかる時は、川が明るく下に覗けたのです。ジヨバンニは、段々心持ちが明るくなってきました。汽車が小さな小屋の前を通って、その前にしょんぼり一人の子供が立ってこっちを見ている時などは、思わず「ホウ、」と叫びました。

ドンドンドンドン汽車は走って行きました。部屋中の人達は、半分後の方へ倒れるようになりながら腰掛にしっかりとしがみついています。ジヨバンニは思わずカムパネルラと笑いました。もう、そして天の川は、汽車のすぐ横手を今までよほど激しく流れてきたらしく、時々チラチラ光って流れているのです。薄赤いカワラナデシコの花があちこち咲いていました。汽車はようやく落ち着いたようにゆっくり走っていました。

向こうとこっちの岸に、星の形とつるはしを書いた旗が立っていました。

「あれ、何の旗だろうね。」ジヨバンニがやっとものをいいました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ。」

「ああ。」

「橋を架けるとこじゃないんでしょうか。」女の子がいました。

「ああ、あれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊の形が見えないねえ。」

その時、向こう岸近くの少し下流の方で、見えない天の川の水がキラッと光って、柱のように高く跳ね上がり、ドオーと激しい音がしました。

「発破だよ、発破だよ。カムパネルラは小躍りしました。

その柱のようになった水は見えなくなり、大きな鮭や鱒がキラッキラッと白く腹を光らせて空中に放り出されて、丸い輪を描いてまた水に落ちました。ジヨバンニは、もう跳ね上がりたくらい気持ちが悪くなっていいました。

「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒なんか、まるでこんなになって跳ね上げられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いいねえ。」

「あの鱒なら、近くで見たらこれくらいあるねえ。たくさん魚いるんだな、この水の中に。」

「小さな魚もいるんでしょうか。」女の子が話につり込まれていいました。

「いるんでしょう。大きなのがいるんだから、小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだから、今、小さいの見えなかったねえ。」ジヨバンニは、もうすっかり機嫌が直っておもしろそうに笑って女の子に答えました。

「あれ、きっと双子のお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓の外を指して叫びました。

右手の低い丘の上に、小さな水晶でもこえたような二つのお宮が並んで立っていました。

「双子のお星さまのお宮って何だい。」

「あたし前に何べんもお母さんから聞いたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で、二つ並んでいるからきつとそつたわ。」

「話してごらん。双子のお星さまが何をしたっての。」

「僕も知ってるらい。双子のお星さまが野原へ遊びに出て、カラスと喧嘩したんだろつ。」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おっかさんお話しなすったわ、……。」

「それから彗星がギーギーフー、ギーギーフーていつてきたねえ。」

「いやだわ、たあちゃん、そうじゃないわよ。それは別の方だわ。」

「すると、あすこに今笛を吹いているんだろつか。」

「今、海へ行ったらあ。」

「いけないわよ。もう海から上がっていらつしゃったのよ。」

「そうそう。僕知ってるあ、僕お話しよう。」

川の向こう岸がにわかになりました。柳の木や何かも真っ黒に透かし出され見えない天の川の波も、時々チラチラ針のように赤く光りました。全く向こう岸の野原に大きな真っ赤な火が燃えられ、その黒い煙は、高く桔梗色の冷たそうな天をも焦がしそうでした。ルビーよりも赤く透き通り、リチウムよりも美しく酔ったようになって、その火は燃えているのでした。

「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろつ。」ジヨバンニがいました。

「サソリの火だな。」カムパネルラがまた地図と首つびきして答えました。

「あら、サソリの火のことならあたし知ってるわ。」

「サソリの火って何だい。」ジヨバンニが聞きました。

「サソリが焼けて死んだのよ。その火が今でも燃えてるって、あたし何べんもお父さんから聞いたわ。」

「サソリって、虫だろう。」

「ええ、サソリは虫よ。だけどいい虫だわ。」

「サソリ、いい虫じゃないよ。僕、博物館でアルコールに漬けてあるの見た。尾にこんなカギがあつて、それで刺されると死ぬって先生がいつてたよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さんこついつたのよ。昔のバルドラの野原に一匹のサソリがいて、小さな虫やなんか殺して食べて生きていたんですって。すると、ある日イタチに見つかつて食べられそうになつたんですって、サソリは一生懸命逃げて逃げたけど、とつとつイタチに押さえられそうになつたわ。その時、いきなり前に井戸があつて、その中に落ちてしまったわ。もうどうしても上がられないで、サソリは溺れはじめたのよ。その時、サソリはこついつてお祈りしたというの。」

『ああ、私は今まで、いくつのものの命を取ったかわからない。そして、その私がこんどイタチに捕られようとした時は、あんなに一瞬命逃げた。それでも、とうとうこんなになってしまった。ああ何にもあてにならない。どうして、私は私の体を、黙ってイタチにくれてやらなかったろう。そしてらイタチも一日生き延びたろうに。どうか神様。私の心をご覧ください。こんなに空しく命を捨てず、どうかこの次には、真のみんなの幸のために私の体をお使いください。』っていったというの。そしたら、いつかサソリは自分の体が真っ赤な美しい火になって、燃えて夜の闇を照らしているのを見たって、今でも燃えてるって、お父さんおっしゃったわ。本当に、あの火それだわ。』

「そっだ。見たまえ。そこらの三角標は、ちょうどサソリの形にならんでいるよ。」  
ジヨバンニは、全くその大きな火の向こうに三つの三角標が、ちょうどサソリの腕のように、こっちに五つの三角標がさそりの尾やカギのように並んでいるのを見ました。そして、本当にその真っ赤な美しいサソリの火は、音なく明るく明るく燃えたのです。

その火が段々後の方になるにつれて、みんなは、何とも言いえずにぎやかな様々の楽の音や、草花のにおいのようなもの、口笛や人々のザワザワいう声やらを聞きました。それは、もうじき近くに町か何かがあって、そこにお祭りでもあるというような気がするのです。

「ケンタウル、露を降らせ。」いきなり今まで眠っていたジヨバンニの隣の男の子が向こうの窓を見ながら叫んでいました。

ああ、そこにはクリスマスストリイのように真っ青なトウヒかモミの木が立って、その中には、たくさんのおくさんの豆電灯がまるで千の蛍でも集まったようについでいていました。

「ああ、そっだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ。」カムパネルラがすぐいいました。(以下原稿一枚？なし)

「ボール投げなら僕決してはずさない。」男の子が大いばりでした。

「もうじきサウザンクロスです。降りる支度をしてください。」青年がみんなにい



いました。

「僕、もう少し汽車に乗ってるんだよ。」男の子がいました。カムパネルラの隣の女の子は、ソワソワ立って支度を始めましたけれども、やっぱりジヨバンニ達と別れたくないような様子でした。

「ここで降りなきゃいけないのです。」青年は、きちっと口を結んで男の子を見下ろしながらいいました。

「いやだ。僕、もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

ジヨバンニがこらえかねていいました。「僕達といっしょに乗って行こう。僕達とこまでだっで行ける切符持ってるんだ。」

「だけどあたしたち、もうここで降りなけあいけないのよ。ここ天上へ行くところなんだから。」女の子がさびしそうにいいました。

「天上へなんか行かなくなたっていいじゃないか。僕達ここで天上よりもっといいところをこらえなけあいけないって僕の先生がいったよ。」

「だっってお母さんも行ってらっしゃるし、それに神様がおっしゃるんだわ。」

「そんな神様うその神様だい。」

「あなたの神様、うその神様よ。」

「そうじゃないよ。」

「あなたの神様って、どんな神様ですか。」青年は笑いながらいいました。

「僕、本当はよく知りません。けれどもそんなんでなしに、本当のたった一人の神様です。」

「本当の神様は、もちろんたった一人です。」

「ああ、そんなんでなしに、たった一人の本当の本当の神様です。」

「だからそうじゃありませんか。私はあなた方が今にその本当の神様の前に、私達とお会いになることを祈ります。」青年は慎ましく両手を組みました。女の子も、ちょうどその通りにしました。みんな本当に別れが惜しそうで、その顔色も少し青ざめて見えしました。ジヨバンニは危なく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあ、もう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」

ああ、その時でした。見えない天の川のずうっと川下に青や橙や、もうあらゆる光で散りばめられた十字架が、まるで一本の木というふうにかかっているの輝き、その上には、青白い雲が丸い環になって後光のようにかかっているのです。汽車の中がまるでザワザワしました。みんな、あの北の十字の時のように真っすぐに立ってお祈りを始めました。あっちにもこっちにも、子供が瓜に飛びついた時のような

喜びの声や、何ともいいよくない深い慎ましいため息の音ばかり聞こえました。そして、段々十字架は窓の正面になり、あのリングゴの肉のような青白い環の雲も、緩やかに緩やかに巡っているのが見えました。

「ハレルヤ、ハレルヤ」明るく楽しくみんなの声は響き、みんなは、その空の遠くから、冷たい空の遠くから、透き通った何ともいえずさわやかなラッパの声を聞きました。そして、たくさんのシグナルや電灯の灯の中を、汽車は段々緩やかになり、とうとう十字架のちょうど真向かいに行つてすっかり止まりました。

「さあ、降りるんですよ。」青年は男の子の手を引き、姉は互いに襟や肩を直してやつて、段々向こうの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら。」女の子が振り返つて二人にいいました。

「さよなら。」ジヨバンニは、まるで泣き出したいのをこらえて、怒つたようにぶっきらぼうにいいました。

女の子は、いかにも辛そうに眼を大きくして、も一度こつちを振り返つて、それから後は、もう黙つて出て行つてしまいました。汽車の中は、もう半分以上も空いてしまい、にわかにならんとして、寂しくなり風がいっぱいに吹き込みました。

そして見てみると、みんなは慎ましく列を組んであの十字架の前の天の川の渚にひざまずいていました。そして、その見えない天の川の水を渡つて、一人の神々しい白い着物の人が手を伸ばしてこつちへくるのを二人は見ました。けれども、その時は、もうガラスの呼子は鳴らされ、汽車は動きだし、と思つうちに、銀色の霧が川下の方からスウツと流れてきて、もうそつちは何も見えなくなりました。ただたくさんのクルミの木が葉をサンサンと光らして、その霧の中に立ち、黄金の円光をもつた電気リスが、可愛い顔をその中からチラチラのぞいているだけでした。

その時、スウツと霧が晴れかかりました。どこかへ行く街道らしく、小さな電灯の一行に点いた通りがありました。それはしばらく線路に沿つて進んでいました。そして二人がその灯の前を通つて行くときは、その小さな豆色の火はちょうどあいさつでもするようにポカツと消え、二人が過ぎて行くときまたつくのでした。

振り返つて見ると、さっきの十字架はすっかり小さくなつてしまい、本当にもうそのまま胸にも吊るされそつになり、さっきの女の子や青年達が、その前の白い渚

にまだひざまずいているのか、それとも、どこか方角もわからないその天上へ行ったのか、ぼんやりして見分けられませんでした。

ジヨバンニは、アーと深く息しました。

「カムパネルラ、また僕達二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行く。僕はもう、あのサソリのように、本当にみんなの幸のためならば、僕の体なんか百ペン焼いてもかまわない。」

「うん。僕だってそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙が浮かんでいました。「けれども本当の幸は一体何だろう。」ジヨバンニがいました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやりしていました。

「僕達しっかりやろうねえ。」ジヨバンニが胸いっぱい新しい力が湧くように、フウと息をしながらいいました。

「あ、あすこ石炭袋だよ。空の穴だよ。」カムパネルラが少しそっちを避けるようにしながら天の川のひところを指さしました。

ジヨバンニはそっちを見て、まるでギクツとしてしまいました。天の川のひととこに、大きな真つ暗な穴がドオンと開いているのです。その底がどれほど深いか、その奥に何があるか、いくら眼をこすってのぞいても何にも見えず、ただ眼がシンシンと痛むのでした。

ジヨバンニがいました。「僕、もうあんな大きな暗闇の中だって恐くない。きつとみんなの本当の幸を探しに行く。どこまでも、どこまでも、僕達一緒に進んで行く。」

「ああ、きつと行くよ。ああ、あすこの野原は、何てきれいだろう。みんな集まってるねえ。あすこが本当の天上なんだ。あつ、あすこにいるのは、僕のお母さんだよ。」カムパネルラは、にわか窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジヨバンニもそっちを見ましたけれども、そこはぼんやり白く煙っているばかり、どうしてもカムパネルラがいったように思われませんでした。何ともいえずさびしい気がして、ぼんやりそっちを見ていましたら、向こうの河岸に一本の電信柱が、ちょうど両方から腕を組んだように赤い腕木を連ねて立っていました。

「カムパネルラ、僕達一緒に行くからねえ。」ジヨバンニがこついいながら振り返っ

て見ましたら、その今までカムパネルラの座っていた席に、もうカムパネルラの形は見えず、ただ黒いピロウドばかり光っていました。ジヨバンニは、まるで鉄砲丸のように立ち上がりました。そして誰にも聞こえないように窓の外へ体を乗り出して、力一杯激しく胸を打って叫び、それからもう咽喉いっぱい泣き出しました。もう、そこらが一ぺんに真っ暗になったように思いました。

ジヨバンニは眼を開きました。もとの丘の草の中に疲れて眠っていたのです。胸は何だかおかしく熱り、頬には冷たい涙が流れていました。

ジヨバンニは、バネのようにはね起きました。町はすっかりさっきの通りに下でたくさんの灯をつづつてはいましたが、その光は何だかさっきよりは熱したというふうでした。そして、たった今夢で歩いた天の川も、やっぱりさっきの通りに白くぼんやりかかり、真っ黒な南の地平線の上では、ことに煙ったようになって、その右にはサソリ座の赤い星が美しくきらめき、空全体の位置は、そんなに変わってもないようでした。

ジヨバンニは一目散に丘を走って下りました。まだ夕御飯を食べないで待っているお母さんのことが胸いっぱい思いだされたのです。どんどん黒い松の林の中を通って、それからほの白い牧場の柵を回って、さっきの入口から暗い牛舎の前へ来た来ました。そこには誰かが今帰ったらしく、さっきなかった一つの車が何かの樽を二つ乗っけて置いてありました。

「今晚は。」ジヨバンニは叫びました。

「はい。」白い太いズボンをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日、牛乳が僕の所へ来なかったのですが。」

「あ、すみませんでした。」その人はすぐ奥へ行って、一本の牛乳瓶を持ってきてジヨバンニに渡しながらまたいいました。

「本当にすみませんでした。今日は昼過ぎ、うっかりしてこうしの柵を開けておいたもんですから、大将さっそく親牛のところへ行って半分ばかり飲んでしまっています……。」その人は笑いました。

「そうですか。ではいたただいて行きます。」

「ええ、どうもすみませんでした。」

「いえ。」

ジヨバンニはまだ熱い乳の瓶を両方の手のひらで包むように持って、牧場の柵を出ました。

そして、しばらく木のある町を通って大通りへ出て、またしばらく行きますと、道は十文字になって、その右手の方、通りのはずれに、さっきカムパネルラ達の灯りを流しに行った川へかかった大きな橋の櫓が、夜の空にぼんやり立っていました。

ところが、その十字になった町かどや店の前に、女達が七、八人ぐらいつ集まって、橋の方を見ながら何かひそひそ話しているのです。それから、橋の上にも色々な灯りがいっぱいなのでした。

ジヨバンニは、なぜかさっと胸が冷たくなったように思いました。そしていきなり近くの人たちへ、「何かあったんですか。」と叫ぶように聞きました。

「子供が水へ落ちたんですよ。」一人がいいますと、その人達はいっせいにジヨバンニの方を見ました。ジヨバンニは、まるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい、河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出ていました。

ジヨバンニは、橋のたもとから飛ぶように下の広い河原へ降りました。

その河原の水際に沿って、たくさん灯りがせわしく上ったり下ったりしていました。向こう岸の暗い土手にも火が七つ八つ動いていました。その真ん中を、もう烏瓜の灯りもない川が、わずかに音をたてて灰色に静かに流れていたのでした。

河原の一番下流の方へ洲のようになって出た所に、人の集まりがくつきり真っ黒に立っていました。ジヨバンニは、どんどんそっちへ走りました。するとジヨバンニは、いきなりさっきカムパネルラと一緒にあったマルソに会いました。

マルソがジヨバンニに走り寄っていました。「ジヨバンニ、カムパネルラが川へ入ったよ。」

「どうして、さっ。」

「ザネリがね、舟の上から烏瓜の灯りを水の流れる方へ押しやろうとしたんだ。」

そのとき舟が揺れたもんだから、水へ落っこったろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押しよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれども、後カムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろっ。」

「ああ、すぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見つからないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」

ジヨバンニは、みんなのいるそっちの方へ行きました。そこに学生達や町の人達に囲まれて、青白い尖ったあごをしたカムパネルラのお父さんが、黒い服を着て真っすぐに立って左手に時計を持ってじっと見つめていたのです。

みんなも、じっと川を見ていました。誰も一言も物をいう人もありませんでした。ジヨバンニは、ワクワクワクワク足が震えました。魚を捕る時のアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして、黒い川の水はチラチラ小さな波を立てて流れているのが見えるのです。

下流の方の川幅いっぱい銀河が大きく写って、まるで水のないそのままの空のように見えました。

ジヨバンニは、そのカムパネルラは、もうあの銀河のはずれにしかないというような気がして仕方なかったのです。

けれどもみんなは、まだ、どこかの波の間から、「僕ずいぶん泳いだぞ。」といいながら、カムパネルラが出て来るか、あるいは、カムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて、誰かの来るのを待っているかというような気がして仕方ないらしいのです。

けれども、にわかにかムパネルラのお父さんがきっぱりいいました。「もう駄目です。落ちてから四十五分経ちましたから。」

ジヨバンニは、思わずかけよって博士の前に立って、「僕はカムパネルラの行った方を知っています、僕はカムパネルラと一緒に歩いていたので。」とおうとしましたが、もう喉がつかまって何ともいえませんでした。

すると博士は、ジヨバンニがいさつに来たとも思ったものですか、しばらくしげしげジヨバンニを見ていましたが、「あなたはジヨバンニさんでしたね。どうも今晩はありがとう。」と丁寧にいいました。

ジヨバンニは何もいえずに、ただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士はかたく時計を握ったまま、また聞きました。

「いいえ。」ジヨバンニはかすかに頭を振りました。

「どうしたのかなあ、僕には一昨日大変元気な便りがあったんだが。今日あたりもう着く頃なんだが。船が遅れたんだな。ジヨバンニさん。明日放課後、みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」そっぴいながら、博士は、また川下の銀河のいっばいに写った方へじっと眼を送りました。

ジヨバンニは、もう色々なことで胸がいっぱいで、何にもいえずに博士の前を離れて、早くお母さんに牛乳を持って行って、お父さんの帰ることを知らせようと思つと、もう一目散に河原を街の方へ走りました。

宮沢賢治作 「銀河鉄道の夜」 はここまでです。

ここから先の「十、切符の秘密」は、「銀河鉄道の夜」の完成をイメージして創作した物語の続きです。宮沢賢治の作ではありません。

「十、切符の秘密」は、「銀河鉄道の夜」の物語が始まった、あの「午後の教室」から再び始まります。

## 十、切符の秘密

「ジヨバンニ、ジヨバンニ……。」どこか遠くからジヨバンニを呼ぶ声がかすかに聞こえてきます。「誰だろう。」ジヨバンニがそつ思った瞬間、ジヨバンニの肩が大きく揺さぶられ、「ジヨバンニ、起きて。」と聞き覚えのある声が耳に入ってきました。

それはカムパネルラの声だったのです。ジヨバンニが不意をつかれたような表情で顔を上げると、そこには確かにカムパネルラが立っていました。

「あ、カムパネルラ、君どうして……。君は、僕が気づかないうちに汽車から突然降りてしまって、いったいどこに……。あ、そうじゃない、君はザネリを助けようとして川に入ったまま……。」ジヨバンニは、もう何が何だかわからないというふうに、驚いた表情でカムパネルラをじっと見つめました。

「ジヨバンニ、何を寝ぼけているんだい。もう授業は終わって、みんな教室の外に集まっているよ。今夜川へ流す烏瓜を取りにいく約束だったろ。」

教室の中はがらんとして、ジヨバンニとカムパネルラ以外は、みんな教室の外に出てしまったようでした。午後の太陽が夕日に変わろうとする頃なのか、窓から差し込んでくる太陽の光は、明るいような明るくないような、そんな微妙な具合に教室の中を照らしているのです。

「ああ、僕、また眠ってしまったのか。」ジヨバンニがため息まじりにつぶやきました。この頃のジヨバンニは、毎日のように先生から授業中の居眠りを注意されていたのです。注意された瞬間は、しっぽを踏みつけられた猫のように驚いて目が覚めるのですが、しばらくすると、またフワッとして眠くなってしまうのです。

「っん、先生に『銀河は何でできているでしょう。』って質問された時、君はもうぐっすり寝込んでいたよ。いつもはすぐに起こすようにいう先生が『今日は銀河のお祭りの日ですから、ジヨバンニさんはきつと銀河の夢でも見ているんでしょう。』っていったって、そのまま君を寝かせておいてくれたんだ。」カムパネルラが少しはにかんだようにいました。

（銀河の夢か……。実際、僕は銀河を旅する夢を見ていたんだ。いや、違う、あれは夢の中で見た夢の旅だったんだ。）ジヨバンニがそう気づいた瞬間、あの銀河鉄道の旅が、はるかかなたの記憶のように感じられ、旅で出会った人達や出来事もうっすらぼんやりとなっていくのです。

ジヨバンニは、机の上の本やノートを鞆にしまいながら、カムパネルラの顔をみて、「よかった。」とつぶやきました。



「え、何。」カムパネルラが不思議そうに問い返しましたが、「いや、何でもないんだよ。」ジヨバンニは笑ってその言葉を返すだけにしておきました。

「ジヨバンニ、みんな待ってる、早く行こう。」カムパネルラがせかすような口調でジヨバンニの背中を押しました。

二人は肩を並べて教室を出ました。教室から校庭の玄関へは、長く真つすぐな廊下が続いています。いつもの放課後なら、誰かが廊下を走り回ったり、教室から笛やアコーディオンの練習の音やらがにぎやかに聞こえてくるのですが、廊下に連なる教室はどこもシーンとして、人の気配は感じられません。今日は、銀河のお祭りの準備があるので、もうみんな帰ってしまったのでした。

「ふふふ、君、そのカードを引き当てた時、本当につれしそうだったね。」カムパネルラがジヨバンニの鞆のポケットに差し込まれた一枚のカードを指して笑いました。

それは、今夜、誰が烏瓜の灯りを川へ流すかを決めるために、クラス全員が引いたカードの中に入っていた、たった一枚の当たりのカードだったのでした。

（そうだ、僕はこのカードを引き当てたんだ。それは、先生がくれたカードで、このカードを引き当てた時、僕は本当につれしかった。でも、灯りを川へ流せることがうれしかったんじゃない。それは、探していた何かに、やっと巡り会えたような気持ちで、うれしいことに理由なんていらなそうに思えるくらいにうれしかったんだ。）

一面黒い唐草のような模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したそのカードは、葉書くらいの緑色の紙で、それを見ると、ジヨバンニはなぜかとても不思議な気分になるのです。

「僕、このカードどこかで見たことがあるような気がする。」

「へえ、いつのこと。」カムパネルラは驚いたように聞きました。

「わからない。ずうつと昔、ひよつとすると僕が生まれる前かもしれない。」

「ジヨバンニ、まだ寝ぼけているのかい。」カムパネルラは笑っていました。

「そんなんじゃない。ずうつとずうつと昔かもしれないし、ひよつとすると、ほんのついさっきかもしれない。でも、わからないんじゃないか、思い出せないだけなんだ。遠い昔だったか、ついさっきだったか、思い出せないけど、確かに間違いなく、僕はこれを見たことがあるんだ。そう、見たことがあるってことだけがわかるんだ。」

あまりに真剣なジョバンニの表情に、カムパネルラは思わず笑い転げてしまいました。「大丈夫だよジョバンニ、君がこのカードを引き当てたことは、みんな知っているんだから、誰も君を差し置いて灯りを川へ流す奴なんていやしないさ。」

「そんなんじゃない。僕は、このカードを、確かに、どこかで……。」

ジョバンニは、立ち止まったままそのカードの不思議な模様をじっと見つめていました。ジョバンニには、見れば見るほど、どこか懐かしい、確かにどこかで手に取って見たことがあるカードに思えてくるのです。

そんな二人を見つけたように、前方から誰かが、真っすぐゆっくりと歩いてくるのでした。

「やあ、ジョバンニさん、お目覚めでしたね。」いきなり、二人の前に先生が立っていました。

ジョバンニは、気まずそうにペコリとお辞儀をするだけで、もう何もいえませんでした。

「先生、ジョバンニ、このカードを見たことがあるっていうんです。」カムパネルラがあきれた表情で先生にいました。

「そうですか、このカードは……。」先生はカードを手に取ると、急に黙り込んでじっとカードを見つめてからぼつりといいました。

「このカードは、ジョバンニさんが引き当てたんじゃなくて、カードがジョバンニさんを引き当てたんです。」

「え、二人は同時に顔を見合わせました。」

「それ、どういうことでしょうか。」ジョバンニが口を開きました。

「どういうこととも、どういうことともありません。そういうことです。」先生は笑いながらあまいに答えるだけでした。

先生はそれだけいって立ち去ろうとしました。その時、先生の手には長い柄のついた大きな網が握られていました。

「ああ、この網ですか。今から、鳥の調査に行くんです。この網で雁やら鷺を捕まえて、足に金輪の記号をつけて、渡りの状況や生息範囲を調査するんです。」

それは立派な真新しい網で、空の銀河に向かって思いつきり左右に振ると、銀河

の星がザザッとすくい取れるような気がするのです。

「それでは、二人とも今夜のお祭りを十分楽しんでください。ごきげんよう。」

先生は、スタスタ立ち去っていったかと思うと急に立ち止まり、振り返っていいました。「ジヨバンニさん、それは銀河鉄道の切符です。今夜、烏瓜の灯りと一緒に銀河がいっぱいに写っている川に流すんです。そうすれば、どこまでもどこまでも銀河の川を流れて行き、あなたが本当に探しているどこかにきつとたどり着くはずですよ。そのために、切符はあなたを選んだのです。」

「先生わかりました。僕、流します。」ジヨバンニは真っ赤な顔で応えるのです。

物語の続き「切符の秘密」は、これで終わりです。

あなたは、今、あなた自身がこのデジタルブック「銀河鉄道の夜」を夢の中で読んでいるのがおわかりですか。あなたの目の前にあるすべての現実、あなたの夢の中にしか存在しません。いったい、あなたの目の前の現実が真実である証拠などどこにあるのでしょうか。ある時突然目覚めたあなたは、それまでの出来事がすべて夢の中の出来事で、現実が夢の中にしか存在しないことに気がつくことになります。そして、その目覚めさえも夢の中の出来事であるのに……。

あとがきにかえて (言葉でイメージする銀河鉄道の夜)

「哲学は、われわれの目の前に拡げられているこの巨大な書物、つまり宇宙に書かれている。」  
天文物理学者 ガリレオ・ガリレイ

「人間とは、私達が宇宙と呼ぶ全体の一部であり、時間と空間に限定された一部である。私達は、自分自身を、思考を、そして感情を、他と切り離されたものとして体験する。それは、意識についてのある種の錯覚である。」

理論物理学者 アルバート・アインシュタイン

「私達は、成長するにつれて自己と他者という二元的なものの見方を深めていきます。しかし、自分と対象物というこの見方は、執着と欲望を生む原因となります。一方、私達は原子からできており、原子は動き回っているからこの物質世界が成り立っています。宇宙を原子のレベルでながめると、ものは一面動き回る原子の濃淡でしかありません。あなたもなければ私もない。しかし、それはそこに存在します。これが一元的に見た宇宙です。ものは原子の濃淡でしかありませんから、それにとられることはありません。一元的な世界こそ真実で、私達は錯覚を起こしているのです。」  
生命科学者 柳沢桂子

「大いなる宇宙がある。一つ一つの命という宇宙がある。それが同じ次元で綿密に関連し存在している。それらがバランスを取り、調和して存在し続けること。それが生きることだ。」  
春日大社宮司 葉室頼昭

「宇宙が存在する限り、意識が存在する限り、私も存在する。助けるために、仕えるために、私にできることをするために。」

チベット仏教最高指導者 ダライ・ラマ14世

「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである。」  
宮沢賢治

あらゆる命はつながっていて一つの命です。

私の命、あなたの命、ジヨバンニの命、カムパネルラの命、  
道端に咲く花の命も、大空を舞う鳥の命も、せせらぎに泳ぐ魚の命も、  
みんなつながっていて一つの命です。

宇宙には無数の命が存在します。

宇宙に存在する一つ一つの命はみんなつながっていて一つの命です。

私達は宇宙という命の中で無数の他の命とつながって生きています。

そして、宇宙と私達はつながっていて一つの命です。

## デジタルブック「銀河鉄道の夜」

デジタル編集：有限会社 DCP Digital Contents Promote  
〒733-0013 広島市西区横川新町 6-6-1906  
TEL：082-295-7106 FAX：082-295-7076

